

受難の主日 2014.4.13

最期のことば

マタイ福音書 27:11-54

27:11 さて、イエスは総督の前に立たれた。総督がイエスに、「お前がユダヤ人の王なのか」と尋問すると、イエスは、「それは、あなたが言っていることです」と言われた。

27:12 祭司長たちや長老たちから訴えられている間、これには何もお答えにならなかった。

27:13 するとピラトは、「あのようにお前に不利な証言をしているのに、聞かえないのか」と言った。

27:14 それでも、どんな訴えにもお答えにならなかったため、総督は非常に不思議に思った。

27:15 ところで、祭りの度ごとに、総督は民衆の希望する囚人を一人釈放することになっていた。

27:16 そのころ、バラバ・イエスという評判の囚人がいた。

27:17 ピラトは、人々が集まって来たときに言った。「どちらを釈放してほしいのか。バラバ・イエスか。それともメシアといわれるイエスか。」

27:18 人々がイエスを引き渡したのは、ねたみのためだと分かっていたからである。

27:19 一方、ピラトが裁判の席に着いているときに、妻から伝言があった。

「あの正しい人に関係しないでください。その人のことで、わたしは昨夜、夢で随分苦しめられました。」

27:20 しかし、祭司長たちや長老たちは、バラバを釈放して、イエスを死刑に処してもらおうようにと群衆を説得した。

27:21 そこで、総督が、「二人のうち、どちらを釈放してほしいのか」と言うと、人々は、「バラバを」と言った。

27:22 ピラトが、「では、メシアといわれているイエスの方は、どうしたらよいか」と言うと、皆は、「十字架につけろ」と言った。

27:23 ピラトは、「いったいどんな悪事を働いたというのか」と言ったが、群衆はますます激しく、「十字架につけろ」と叫び続けた。

27:24 ピラトは、それ以上言っても無駄なばかりか、かえって騒動が起こりそうなを見て、水を持って来させ、群衆の前で手を洗って言った。「この人の血について、わたしには責任がない。お前たちの問題だ。」

27:25 民はこぞって答えた。「その血の責任は、我々と子孫にある。」

27:26 そこで、ピラトはバラバを釈放し、イエスを鞭打ってから、十字架につけるために引き渡した。

27:27 それから、総督の兵士たちは、イエスを総督官邸に連れて行き、部隊の全員をイエスの周りに集めた。

27:28 そして、イエスの着ている物をはぎ取り、赤い外套を着せ、

27:29 茨で冠を編んで頭に載せ、また、右手に葦の棒を持たせて、その前にひざまずき、「ユダヤ人の王、万歳」と言って、侮辱した。

27:30 また、唾を吐きかけ、葦の棒を取り上げて頭をたたき続けた。

27:31 このようにイエスを侮辱したあげく、外套を脱がせて元の服を着せ、十字架につけるために引いて行った。

27:32 兵士たちは出て行くと、シモンという名前のキレネ人に出会ったので、イエスの十字架を無理に担がせた。

27:33 そして、ゴルゴタという所、すなわち「されこうべの場所」に着くと、

27:34 苦いものを混ぜたぶどう酒を飲ませようとしたが、イエスはなめただけで、飲もうとされなかった。

27:35 彼らはイエスを十字架につけると、くじを引いてその服を分け合い、

27:36 そこに座って見張りをしていた。

27:37 イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王イエスである」と書いた罪

状書きを掲げた。

27:38 折から、イエスと一緒に二人の強盗が、一人は右にもう一人は左に、十字架につけられていた。

27:39 そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって、

27:40 言った。「神殿を打ち倒し、三日で建てる者、神の子なら、自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い。」

27:41 同じように、祭司長たちも律法学者たちや長老たちと一緒に、イエスを侮辱して言った。

27:42 「他人は救ったのに、自分は救えない。イスラエルの王だ。今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば、信じてやろう。

27:43 神に頼っているが、神の御心ならば、今すぐ救ってもらえ。『わたしは神の子だ』と言っていたのだから。」

27:44 一緒に十字架につけられた強盗たちも、同じようにイエスをののしった。

27:45 さて、昼の十二時に、全地は暗くなり、それが三時まで続いた。

27:46 三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。

27:47 そこに居合わせた人々のうちには、これを聞いて、「この人はエリヤを呼んでいる」と言う者もいた。

27:48 そのうちの一人が、すぐに走り寄り、海綿を取って酸いぶどう酒を含ませ、葦の棒に付けて、イエスに飲ませようとした。

27:49 ほかの人々は、「待て、エリヤが彼を救いに来るかどうか、見ていよう」と言った。

27:50 しかし、イエスは再び大声で叫び、息を引き取られた。

27:51 そのとき、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け、地震が起こり、岩が裂け、

27:52 墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った。

27:53 そして、イエスの復活の後、墓から出て来て、聖なる都に入り、多くの人々に現れた。

27:54 百人隊長や一緒にイエスの見張りをしていた人たちは、地震やいろいろの出来事を見て、非常に恐れ、「本当に、この人は神の子だった」と言った。

## 説教

受難の主日、かっこで枝の主日とあります。パームサンデー、棕櫚の主日ともいわれます。きょうはイエスのエルサレム入城の記念日です。棕櫚の葉をもって会堂に入場する儀式がおこなわれる教会もあります。わたしたちの教会もいつか入場儀式ができたならあと望んでいます。

逮捕、裁判、刑の執行、この出来事をイエスの受難といいますが、ユダの裏切りやペテロの否認などさまざまな出来事が福音書には記されています。

きょうはテキストに記されたイエス最後のことば「エリエリレマサバクタニ」に聞いていきましょう。

**三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」**これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。27:46

三時ごろとはイエスが絶命した時刻をいい「神に見捨てられた」とイエスが叫んだ、これがイエス末期のことばだった、ということが証言されています。

このことばを文字通りに受けとめると、イエスの嘆き、悲嘆であり、恨み節です。どう解釈するか、古来からいろいろな見方があります。

1) これは賛美だ。エリエリレマサバクタニは詩篇第22編の冒頭です。この賛美を十字架上でイエスは歌ったのだという解釈です。最初は神に対する不信で始まりますが最後は神賛美でおわります。イエスは最後までいえずに息絶えたという解釈になります。これにたいして、悠々と賛美歌を歌っているのは不自然だという意見もあります。

2) たしかに神に対する不信のことばであるが、これは逆説として受け取るべきだ。あのイエスがかかりにも神に対して恨みをもつはずがない。ちょっと強引な意見ですがこのような見方もあります。

3) これはイエス断末魔の叫びだ。このような身も蓋もない見方もあります。

イエス末期のことばが詩篇 22 編の冒頭であることは確かめればわかります。また詩篇 22 編からの引用は冒頭だけでなくほかにもあります。

**わたしを見る人は皆、わたしを嘲笑い／唇を突き出し、頭を振る。「主に頼んで救ってもらうがよい」詩篇 22:8-9 対応箇所マタイ 27:39-40**

**わたしの着物を分け／衣を取ろうとしてくじを引く。2 詩篇 2:18-19 対応箇所マタイ 27:35**

このような福音記事のことを事後予告といいます。ひらたい言い方をすれば「じゃんけんのあとだし」です。さきにお手本があってそれに準じて記述したとも理解できるからです。マタイは詩篇を参照しながら受難記事を記したのか？詩篇 22 編からの引用説はこの新たな疑問を呼び起こします。

ところで、レビ記 16 章にある贖罪の日の儀式の定め、アザゼルのやぎというものがあります。大祭司アロン（モーゼのお兄さん）は民の中から二頭のやぎを引いてきて、一頭は贖罪として主にささげられ、もう一頭は荒野に住むとされたアザゼルのもとに追放したということが記されています。イエスが、私たちの罪を背負わされてエルサレム城外のゴルゴタで苦しみを受けられたさまを思い起こさせます。

二頭のやぎは、一頭は主のため、一頭はアザゼルにということになります。前者は主への尊い犠牲（いけにえ）。後者は民の罪を負わせて荒野のアザゼルに。アザゼルの本来の意味はよくわかっていませんが、この出来事はスケープゴートの語源になりました。

■アザゼル 贖罪の日に 1 頭のやぎを選び、その上に民の罪を負わせ、アザゼルとして荒野に放った（レビ 16 : 8-10）。このアザゼルの意味について多くの解釈が試みられている。（1）野に送られるやぎのこと（2）不定詞として、移動、除去、解放を示す（3）不毛の地、荒野のこと（4）荒野にいる悪霊の名などがおもなものであるが、いまだその意味は不明である。この語は、アーザル（除去する）の強意で、「全き除去」「罪の全き赦し」の意味にとる方が、このやぎの持つ役割から妥当と思われる。そして悪霊に対していけにえがささげられるのではなく、罪を負わせたやぎを悪霊の住む荒野に追放し、罪を民から遠く離れた所へ追いやることを意図し

ていると言えよう。（新聖書辞典より）

主イエスの十字架の出来事は主への尊い生贄と考えられています。これはレビ記でいう一頭目のやぎの意味です。礼拝で歌うアニュスデイ「世の罪を救う神の子羊」、これが本筋で、イエスの十字架の死はわたしたちの罪のためというのはわかります。では、なぜ主イエスは罪を着せられて、しかも「神の領域」を象徴するエルサレム宮殿の外に追い出されて、ゴルゴダで処刑されなければならなかったのか。主イエスの十字架の出来事にはもう一つの面があると「アザゼルのやぎ」はわたしたちに教えています。

**うらうらに 照れる春日に ひばりあがり 心悲しも ひとりし思へば 万葉集 19-4292**  
喜びの中にも悲しさ、嘆きはある。大伴家持は楽しさと悲しみ、喜びと憂いをの対比をひばりのさえずりとそれを聞く人間とおして32文字に表現しました。受難週はいつも春です。日本に生きるわたしたちはうらうらとした春のある日曜日に十字架にイエスを偲びます。ただ、わたしたちは「ひとりし思へば」であると同時に世界中の人々と十字架のイエスを記念しています。小さくされた者、貧しい人によりそってくれたイエス、嫌われ者、収税人、売春婦の友であったイエス、そのイエスは裏切られ、鞭打たれ、木に吊るされて、絶叫し、神に見捨てられたとって十字架の上で絶命しました。十字架の上で賛美をうたい悠然と苦い杯を飲み干したイエスなのか、それとも友に裏切られ、死刑執行人に鞭打たれ、十字架に釘打ちされ、神に見捨てられたとって苦悶のなか絶叫して息絶えるイエスだったのか。教会は過去現在を問わず、イエスの十字架の苦しみと死を美化し、しばしばその現実の苦悩や苦難が見えなくなり、弱者の苦難に無関心になります。またプロテスタント教会の多くは、十字架を祭壇におくこと、十字を切ることが廃止され、内面化されています。シンボルとしての十字架にイエスが架かっていません。彼はもうすでに十字架からおりにいるという説明を誇らしげにする人もいます。人は見たものではなく見たいものを見る、と言われていています。皮肉な言い方

ですがひとの限界を見極めた叡智のことばともいえるでしょう。

エリエリレマサバクタニ、わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか。

いま告げられたイエスの最期のことばからあなたは何を聴き、何を受け取りますか。